

2013 年度レポート作成支援の状況について【報告】

小 島 浩 子 （信州大学附属図書館）

山 口 美 咲 （信州大学附属図書館）

1. はじめに

信州大学附属図書館中央図書館（以下、当館）における、授業と連携したレポート作成支援は今年で2年目を迎えた。本稿では、2年目となる当館のレポート作成支援の状況について報告する。なお、レポート作成支援についての概要および1年目の取り組みについては、附属図書館研究第2号「信州大学におけるレポート作成支援：図書館と授業との連携の試み」（加藤，2013. p.125-133）を参照いただきたい。

2. 前期のレポート作成支援について

平成25年度前期は昨年度と同様に、初年次生を対象として開講しているゼミナール「大学生基礎力ゼミ」に組み入れる形でレポート作成支援を実施した。今年度大幅に変わった点として、昨年度は1コマだったゼミが、今年度は6コマに大幅に拡大したことが挙げられる。授業数の増加により、受講学生数は昨年度の25名から150名と6倍に増加し、授業を担当する教員も1名から6名へと増加した。

このように、受講学生数と担当教員が大幅に増加したことから、レポート作成支援の予約方法を改善する必要が生じた。これについては、信州大学 e-Learning センターの協力により、e-APLS からオンライン上で学生が予約を行うしくみを作ることによって解決することができた。e-APLS とは、同センターが運営する、Moodle というオープンソースの LMS (Learning Management System) である。これにより、昨年度まで図書館に来館して予約を行っていたものが、オンライン上でどこからでも予約ができるようになった。また、予約状況を担当教員や指導員も随時確認できるようになったことも、改善点として挙げられる。ただ授業期間の途中でシステムの改修があり、予約手順が変わったため、学生の混乱を招いてしまった点は残念であった。

前期にレポート作成支援を受けた学生の人数は、のべ204人であった。この人数は、昨年度の46人から約4.5倍の増加となった。しかし、対象授業の受講学生人数が昨年度から6倍に増加していることを考えると、学生1人あたりの指導回数は減少した。この原因としては、6クラスのゼミの課題レポートの締切りが同じ週となってしまい、同じ時期に予約が集中したことが考えられる。

また、対象ゼミのうち2つのクラスについては授業の最後にアンケートを実施した。その結果は表1のとおりである。昨年度の同じ授業のアンケート結果と比較すると、若干の変化は見られるものの大きな差異はなかった。今年度も80%以上の回答者(48人中39人)が「レポート作成支援は、私のレポー

ト作成に役立った」と回答しているうえに、約70%の回答者(48人中30人)が「この支援を後期も受けたいと思う」と回答し、約78%の回答者(46人中36人)が「友達や来年の一年生に、この支援を受けることを勧めたい」と回答していることから、受講学生にとって効果の高い支援であったと考えることができる。

表1 学生アンケート結果

	全くそう 思わない	そう思わ ない	どちらで もない	そう思う	強くそう 思う	計
1. レポート作成支援は、私のレポート作成に役立った	2	1	6	18	21	48
2. 必要な時に支援を受けることができた	2	2	12	19	13	48
3. この支援を受けてレポートの基本的な書き方が身についた	0	2	12	21	14	49
4. この支援を受けることで、レポートに対する抵抗感が少なくなった	3	3	24	13	5	48
5. 支援を受ける場所(図書館カウンター前・階段下)は適切である	0	4	12	22	10	48
6. 予約は取りやすかった	1	5	16	15	11	48
7. 指導員は、レポート作成について十分な知識を持っていた	1	4	9	23	11	48
8. 指導員は、適切な言葉を使い、適切な態度で私に接した	0	2	8	19	19	48
9. この支援を後期も受けたいと思う	1	5	12	21	9	48
10. 友達や来年の一年生に、この支援を受けることを勧めたい	0	2	8	18	18	46

(単位：人)

3. 後期のレポート作成支援について

後期は「人を動かす理論と方法ゼミ」と「高等教育を受けた人になるゼミ」という2つの授業を対象としてこの支援を実施した。「人を動かす理論と方法ゼミ」が前期から後期へ移動したことを除くと、対象授業については昨年と大きな変化はなかったが、支援を実施する図書館側に大きな変化があった。

というのは、今年度の9月から当館は耐震・機能改修工事が始まり、仮閲覧室での規模を縮小した開館になったからである。当初ライティング・センター自体を後期は中止するという案も出たが、どんなに小規模であっても続けたいという担当教員と図書館職員の思いにより、仮閲覧室で非常に狭いスペースとなりながらもレポート作成支援を行った。狭いスペースの中で指導してくれた指導員と、支援を受けに来た受講学生には感謝している。

4. 指導員について

支援にあたる指導員は、昨年度のラーニングアドバイザー(LA)から、今年度はライティング・センター指導員(以下、指導員)という名称に変更した。また、指導員の選考方法についても、昨年度は選考を実施せず希望する大学院生を採用したが、今年度は応募の際に課題レポートの提出を義務付け選考を実施した。このことにより、意欲がありさらにレポートを書く力がある指導員を採用することができた。また、指導員に対して課題レポートの都度、自分でも実際にレポートを作成するよう課し、さらに受講学生が提出したレポートと採点結果を元にした研修を毎月実施した。これらにより課題に対して理解が深まり、4月の指導開始時点では日本語の文章法や引用を主に指導していたものが、前期末には主述の対応や内容の整合性といった、より深い内容の指導が可能となった。

また、指導員の記録方法についても改善を行った。初年度の指導記録は紙の形で記録を行っており、その指導記録のファイルが図書館にあったため、担当教員やほかの指導員がその指導記録を確認するためには、図書館に来館する必要がある。今年度は予約システムと同様にe-APLSを使用してオンライン上に記録を残す方法に変更した。また、個別の学生への指導記録だけでなく、その日の感想や問題点・疑問点等を自由に書けるページを用意し、指導を行った日にはこのページに必ず何か記録してもらうことにした。

これらの変更により、指導員はどこからでも自分が担当する日にどの学生がどの時間に予約しているかを確認し、さらに指導を受ける学生に対して誰がいつどのような指導を行ったかを確認することが可能になった。また、担当教員も随時指導員の指導記録を確認できるようになり、必要に応じて問題点の指摘や改善点の指示等を行うことができるようになった。昨年度と比較して指導員同士の情報共有がスムーズにできるようになったことから、ほぼすべての指導員がオンライン上の指導記録は「非常に役立った」と回答している。

前期末に実施した指導員へのアンケート結果は表2の通りである。こちらは、昨年度の指導員へのアンケートと比較すると、全ての項目において、「そう思う」「強くそう思う」が増加している結果となった。このアンケート結果を見ると、指導員全員が指導員の仕事にやりがいを感じただけでなく、本人のレポート作成能力や説明能力、指導能力が向上したと感じていることが分かる。

表2 ライティング・センター指導員アンケート結果

	全くそう 思わない	そう思わ ない	どちらで もない	そう思 う	強くそう 思う	計
1. 私はこの仕事に真剣に取り組んだ				1	5	6
2. この仕事はやりがいのあるものだった				1	5	6
3. この仕事によって、自身のコミュニケーション能力が向上した			1	2	3	6
4. この仕事によって、自身のレポート作成能力が向上した				5	1	6
5. この仕事によって、自身の説明能力や指導能力が向上した				3	3	6
6. この仕事を通して、私は学生の役に立ったと思う			1	4	1	6

(単位：人)

5. 次年度に向けて

今回対象授業が大幅に増加したため、レポート課題の締切りがある特定の週に集中してしまい、その週だけライティング・センターの予約が取れない、という状況が発生してしまった。課題の提示が早い授業を受講していた学生は自分の希望する曜日に予約をとることができるが、課題の提示が遅い授業を受講していた学生は、予約をとろうとしても既に枠が埋まってしまっていたのである。前期の「大学生基礎力ゼミ」は同一シラバスで開講している授業であるため、それぞれの授業ごとに進め方を大幅に変えることは難しいが、次年度はレポートの締切りの時期をできるだけずらすなど、事前の調整が必要だと痛感した。次年度はさらに授業数が増え6コマから8コマになることが決まっているため、よりこの点への対応は重要になってくることが明白である。

また、初年度は1人の教員の授業を対象として開始したライティング・センターだが、授業を担当する教員数が増加したことにより、図書館職員と担当教員、指導員と担当教員との間の情報共有の方法についても課題が残った。今年度実施したWeb上での情報共有については、それなりの効果があったと感じているが、一方でやはりWebとメールのみでの情報共有には限界があった。指導員のアンケートの自由記述でも、指導の早い時期に全ての指導員と担当教員が集まって直接顔を合わせる機会を望む声が多数寄せられたことから、次年度は実際の指導開始前に担当教員と指導員が顔を合わせて情報交換する機会が必要だと考えている。

さらに、今年度実施している耐震・機能改修工事に続いて、当館は次年度に増築を予定している。次

年度も仮閲覧室での開館となるため、引き続きスペースの問題が残る。今年度は対象学生が多い前期の期間中はまだ改修工事が始まっていなかったため、ある程度余裕のあるスペースで実施する事が可能だったが、次年度は年度当初から一年間工事が続くため、支援の場所をどこにどれだけ確保することができるかは頭の痛い問題である。

このライティング・センターによるレポート作成支援については、授業を行うのは教員であり、ライティング指導を行っているのは指導員の学生である。その中での図書館の役割について改めて考えると、ひとつは場の提供であるが、もうひとつはこの両者をつなぐ架け橋であると考えることができる。今年度を振り返ってみると、両者を十分につなぐことができていなかった点が随所に感じられることから、次年度以降のライティング・センターの中で、この図書館の架け橋としての役割を意識しながら実施する必要があるであろう。改善点や課題は山積みであるが、今後このレポート作成支援を発展させていきたい。

参考文献

加藤善子、小島浩子「信州大学におけるレポート作成支援：図書館と授業との連携の試み」信州大学附属図書館研究 . 2: 125-133 (2013)